西田哲学と「現実主義」の問題

Nishida's Philosophy and the Problem of "Realism"

京都大学宗教学専修Ｄ３　森レイ　Mori Rei

使用言語：日本語

要旨

本発表の主題は、西田哲学の「現実主義」の問題である。一九四五年、投獄される二ヶ月前の三木清は、書簡のなかで「西田哲学は東洋的現実主義の完成ともいうべきものでしょうが、この東洋的現実主義には大きな長所と共に何か重大な欠点があるのではないでしょうか」と述べている。西田哲学の長所と急所を、「現実主義」に見ているのである。本発表は、この「現実主義」の問題にせまることで、西田哲学の限界と可能性を探ることを目的とする。

その際考えねばならないのは、ここで批判されている「現実主義」がどのような「現実主義」か、ということである。「現実主義」の批判と言えば、丸山眞男の論文「「現実」主義の陥穽」(1952) がよく知られているが、ここで批判されている「現実主義」とは、「現実」を所与のもの、「既成事実」として、その「既成事実」に屈服する「現実主義」、「きわめて錯雑し矛盾した」社会的現実の一側面だけを捉え、その「一次元」的な「現実」に従う「現実主義」であった。しかし西田哲学における「現実主義」はそのようなものではない。西田において「現実主義」がもっとも明瞭に表れているのは論文「実践と対象認識」(1937) だが、そこでは「現実即絶対」とさえ言われる（それは大乗仏教的な態度とも言われる)。しかしそれはけっして既存の「現実」を絶対視してそれに屈服するような「現実主義」ではなく、「現実そのままが絶対であるというのではない」「いつも現実は現実自身を越えて居るのである。そこにはいつも絶対に触れると考えられるのである」と論じられるような「現実主義」であった。「現実」が「現実」自身を越えるところに「現実即絶対」を見るこの「現実主義」はけっして「既成事実」に屈服する「現実主義」ではなく、また後に「絶対矛盾的自己同一」とさえ言われるまでに現実の錯雑矛盾を見据えようとした西田の哲学は、けっして「一次元」的な「現実」につき従うことで尽きるものではない。

ではなぜ「現実主義」は西田哲学の長所であると同時に「重大な欠点」と言われるのか。発表者はこの問題を西田哲学のなかから探り出し、そこから西田哲学の限界と可能性について考察する。